

昭和58年に上智大学に提出した修士論文のテーマは「サツマイモの日本への伝来と普及に関する文化人類学的諸問題」だった。

そして今でもサツマイモの研究のために、世界中を飛び回っている。おかげで、わたしたちは川越に居ながらにして世界の動きを知ることができる。

たとえば昨夏（昭和63年）には、先生を頼ってトム・ヒューズ氏夫妻が川越にきた。アメリカの首都、ワシントンの自宅内にジャガイモ博物館を作り、夫婦で経営しているそうで、世界広くといえどもポテト・ミュージアムはうちだけだと胸を張っていた。

川越では今春（平成元年）、「いも膳」の「サツマイモ資料館、いも倶楽部」がオープンした。世界でやはり最初のスイートポテト・ミュージアムの開設に当り、関係者がワシントンからの珍客から、どれだけ励まされ、勇気付けられたか分らない。

また昨秋には、タイのバンコクで国際熱帯いも類学会が開かれた。それに参加したドゥ

エル先生のみやげ話もすばらしかった。

東南アジアには貧しい人が多い。だがどんなに食べるものがなくても、サツマイモだけは食べたがらない。それはブタのえさぐらいにしか考えられていないからだという。

そうした風潮の所へ行って、ドゥエル先生が発表したのは、日本におけるサツマイモの利用方法だった。スライドで様々な食品の作り方と食べ方を紹介したそうだが、発表が終ったとたんに東南アジアの国々の学者や研究者たちが駆け寄ってきて握手を求めたという。

日本は世界の経済大国だ。その金持ちの日本人が、こんなにまでサツマイモを愛し、大切に扱っているとは知らなかった。このことを伝えれば、われわれの国の者のサツマイモに対する考え方も、きっと変わるに違いないと。

とくに麺類が大好きな彼等にとって、イモソウメン、イモソバ、イモウドンなどへの関心は大変なものだったという。

◎ ジャガイモ焼けた

ある日会社に、妻から電話がかかって来た。

妻「貴方ー、ジャガイモが焦げているのー」

夫「そんなことで、イチイチ会社に電話するんじゃないの」

妻「だって、家が燃えてんだもん」

◎ 急な来客

夫が同僚を何人か連れてきた。

「困ったわ、今ジャガイモしかないわ」

「じゃ、こうしろよ。台所で皿を1枚こわして、『あら、せっかくのビフテキ台無しにしちゃった』と言って、ジャガイモだけ持ってこいよ」

夫が客間で待っていると、期待どおりの派手な音が聞こえてきた。

「あら、ジャガイモひっくり返しちゃった」

◎ イモねいちゃんを連想

イモ研究が熱心のA君がデートの時に言った。

「僕、昨日は1日中君のことを思っていたよ」

「まあ、ほんと！素適だわ。」

と、彼の腕をゆさぶった。

「それで、昨日はどこにいたの？」

「イモ畑さ」

◎ ジャガイモの皮をむけるか

A子が友達に言った。

「私、彼に振られたみたい」

「それはかわいそうに、でもどうして？」

「彼が、私にジャガイモの皮をむけるかどうか聞いたの」

「そのくらい、別に悪くないじゃないの」

「それが、肉ジャガの煮ころがしをつくって
いる時なのよ」 （北海道立中央農業試験場

主任研究員 浅間和夫）